

(始良郡福山町福沢字中尾立)

位置と環境

馬の背状に突き出た、標高約355mのシラス小台地の縁辺部に立地する。

調査の経緯

県営特殊農地保全整備事業（新原地区）に伴い、平成4年（1991）福山町教育委員会によって発掘調査された。

遺構と遺物

縄文時代・平安時代・現代の3時期にわたる複合遺跡であるが、平安時代が主体となる。

平安時代の遺構は掘立柱建物跡5棟、溝状遺構2条、土坑4基が検出された。掘立柱建物跡は1棟（1号建物）を除き、主軸方向が磁北から西に32度～42度ふれており、ほぼ同時期に建立されたようである。

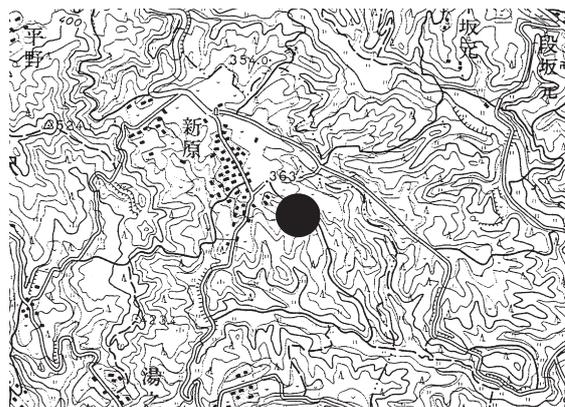
これら4棟（2号、3号、4号、5号）の建物では、焼土が建物の隅あるいは中央で検出された。特に、4号建物跡では焼土の周囲にコの字状に礫が積まれ、ほかの建物の周囲からも礫が散在していた。この状況からこの施設はカマドの可能性を指摘されている。

建物規模は、5棟のうち3棟が2間×3間の建物で、梁間が3.3m～4m、桁間が4.5m～5.2mある。それぞれの柱間の距離は統一性が無く、柱列も一列ではない。1号建物跡は2間（3.3m）×2間（3m）の建物で、磁北から西に5度ふれている。また、南北に長い2間（3.4m）×4間（6.1m、7.1m）を測る3号建物跡は、北端の柱列では柱間がほかの建物の2間分もある。建物の南半分は特殊な造りをしており、住居とは性格の異なった建物である可能性がある。

出土遺物には土師器・内黒土師器・内朱土師器・須恵器があり、土師器のなかに墨書土器がある。また、土製品には紡錘車・土製丸玉・焼塩土器が出土した。供膳形態の須恵器坏身や、内面に放射状のタタキをもつ須恵器甕や、焼塩土器が出土したことから、建物の建立年代は9世紀前半であり、10世紀代に下らない時期まで存続したと考えられる。

遺跡の性格としては、集落規模・建物規模や出土遺物から宗教的な修行地を想定している。

現代遺構では、第2次世界大戦後に行われた、文



第1図 中尾立遺跡の位置

明年間（15世紀後半）の桜島の噴火に起因する火山灰・火山礫（ボラ）を除去する作業によって築かれた、ボラ塚の調査が行われた。この塚の場合は、底辺の幅が約10m、長さが約60mあり、ほぼ三角形に近い断面を呈している。

特徴

- ・掘立柱建物跡が5棟検出され、平安時代後半の集落形態を考えるうえで貴重な遺跡である。
- ・墨書土器や焼塩土器が出土したことから、掘立柱建物跡の規模などと併せて考えると、本遺跡の特殊な性格が想定される。

資料の所在

出土遺物は、福山町教育委員会に保管されている。

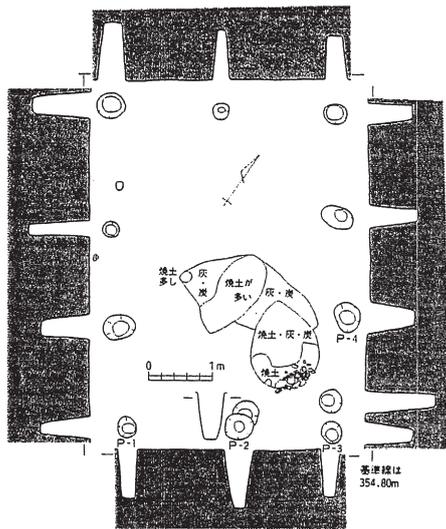
参考文献

福山町教育委員会1994「中尾立遺跡」『福山町埋蔵文化財発掘調査報告書』2

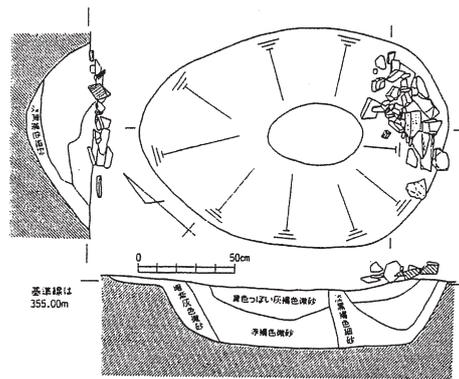
(八木澤一郎)



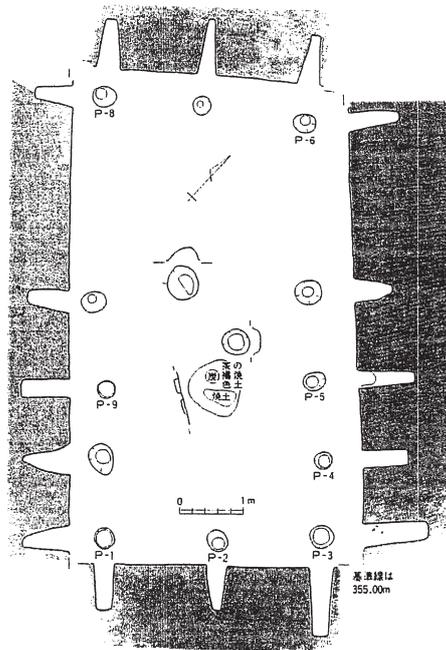
第2図 遺構配置図



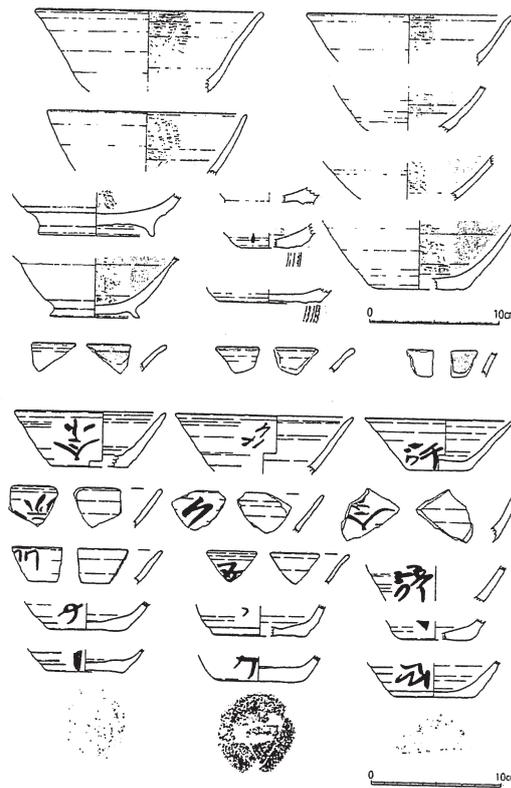
第3図 4号掘立柱建物跡



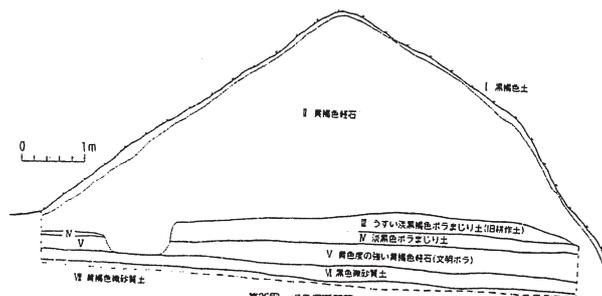
第4図 4号掘立柱建物跡内炉跡



第5図 3号掘立柱建物跡



第6図 出土遺物実測図



第7図 ポラ塚断面図